



ココット!

ふくしまりポート part1
高倉美香
鳥取県生協副理事長
西村弘命
組合員活動グループ

福島の子どもたちが寄り添って

「ココット」10年 感謝のびびり

東日本大震災から11年目の昨年11月18日(金)福島市内のホテルで「ココット・感謝のつどい」が開催され、これまでの活動の振り返りが行われました。福島第一原発事故では広範囲にわたる深刻な放射能汚染を引き起こし、福島の子どもたちは外出制限のために外遊びや野外でのスポーツ、学校行事等の機会が奪われ、不安とストレスを抱えた生活をしていました。そんな子ども達を支援しようと、福島県生協連が中心となってはじまったのが「子ども保養プロジェクト」(通称：「ココット」)です。

始まりは多様性を認め合うこと

震災の年、佐藤一夫さん(福島県生協連専務理事・福島県ユニセフ協会事務局長)はウクライナ、ペラルーシに足を運びチエルノブイリ原発の事故後の対応を学びました。事故から26年経過しても世界の35カ国が「チエルノブイリ子ども保養プロジェクト」を続けていることを知り、そこから福島での子ども支援が始まりました。運営では、「一人一人の考えや立場を尊重し多様性を認め合うことを大切にしたい」と話されました。原子力災害は、考え方の違いから時に分断や差別を生むのです。スタートした「ココット」は、協力のつながりの中で、大きな支援に広がっていきました。

参加8万人・支援金6億

「ココット」は10年間で1873企画、述べ参加者数は保護者も含め約8万7千人が参加。募金・支援金はユニセフ協会や日本生協連らから総額6億4千万以上に上ります。多くの人ががこのプロジェクトを支援してきました。

学生ボランティアの活躍で子どもをサポート

大阪府協同組合連合会では春と夏の年2回、地元大学生の協力を得ながら、20名前後の子どもたちを受け入れてきました。たこ焼き企画や様々なレクレーション、USJなど、大阪の特色を生かした企画を続けてきました。19年春には大阪と福島の子どもたち同士の交流も実現。当時大学生で、両県の子どもたち



(写真左)大阪の大学生との模擬授業(写真下)福島県野口英世記念館にて福島と大阪の子どもたちと交流の様子



いばらきコープ松尾掌さん

茨城県は福島県の隣県であり、現在も県内で2,574名(全国1位)が避難生活を送っています(昨年8月1日時点)。いばらきコープでは各地のJA、県・市町村の支援を得て継続的に「ココット」を開催。収穫体験や工房体験、サッカー教室などを開催してきました。いばらきコープの松尾掌さん(いばらきコープ執行役員)は福島の子どもが母親に「ココ歩いていい?これさわっていい?」と尋ねる場面を目にし、放射能汚染の現状にショックを受けたと言います。一方「協同組合の連携で長期支援が可能になった。生協っていいなあ。」としみじみ話されました。



ほんわか元代表 田中いずみさん

子どもたちの支援は大人の責任

北海道の七飯町でホームステイの支援をした田中いずみさん(ほんわか元代表)は、「何も無い運動場をただただ元気に走り回り続ける福島の子どもたちを見た。子ども達の夢を叶えるために、支援をすること。それは大人の責任です。」と話されました。元北海道・東北地連事務局長の住吉登さんは、海岸の高台の保養所で「ここは津波が来ますか?」と子どもに尋ねられたエピソードを紹介。支援者も子どもたちとの交流を通して、福島原発・津波被害について体感し学んでいきました。

子どもはみんな守って育てる

福島県内の「ココット」はコープ会津、コープふくしま・みやぎ生協、パルコープの理事さんや地区の委員さんが支えています。メンバーの一人は「子どもはみんな守る、みんな育てる、それを実践するのが「ココット」です。」「大変な経験をしたけど、より良くしていきたいし、そんな想いが大きな力になっています。」と話して下さいました。ココットは週1回実施しされていて、次週は茨木の海に行くとのこと。皆さんとても前向きで元気でした。



大学生の福井朱里さんのお話(震災当時小学2年生)
原発事故後、毎日放射能の恐怖におびえ、家から出られず、外出時はマスク・手袋・帽子が必要で学校の野外授業はできませんでした。北海道七飯町でのホームステイでは農業について学び、野菜を収穫してカレー作り、乳を絞ってバター作りをしました。安心して食べる喜びや農業や酪農が様々な人達の支えで成り立っていることを学びました。また、現地の小学生との交流会では協同性を育んでいただきました。当時福島の大人たちは、生活の再建で精一杯でした。手をさしのべて下さった皆さんに感謝します。大学ではボランティアサークルに入り、将来は何か必要とされているか考えられる人になりたいです。



福島の子どもはみんな守って育てる。みんな育てる、それを実践するのが「ココット」です。大変な経験をしたけど、より良くしていきたいし、そんな想いが大きな力になっています。と話して下さいました。ココットは週1回実施しされていて、次週は茨木の海に行くとのこと。皆さんとても前向きで元気でした。

福島では子ども人口減少、心の健康、肥満など原子力災害による影響が現在も続いています。3月号で特集予定です。次回2月号 2月27日、配布福島第一原発廃炉ツアー・震災遺構の見学を報告します。

「ココット」感謝のつどいに参加して高倉美香副理事長
つどいでは支援の中心的な役割を果たした方々のお話を聴き、改めて福島の子どもたちへの支援の重要性を認識し、これからの災害支援のあり方や福祉活動にも活かすことができると感じました。協同の力がそれをさせてくれると思います。私も2013年、コープCSネットが企画した茨木でのココットにスタッフとして参加しました。外で自由に遊ぶ子どもたちの笑顔は最高に輝いていたことが、今でも忘れられません。それは、福島の子どもたちの厳しい現実の裏返しでもあったと感じます。支援に携わることができたことは感慨深く、次の世代へこの取り組みを繋げていくことが大切と感じました。